

生まれたばかりの赤ちゃんを抱く山本さん。新しい命が、優しさの輪を広げる(高松市の「ほっこ助産院」で)

日なたほっこ気分で、寄り添う場にしたくて



高松で全国初の施設を運営・山本さん

介護の場併設 助産院に結ぶ 大家族の絆



『ほっこ』。ちょっと変わった名の助産院が高松市にある。同市南部の春日町。五つの出産室に、お年寄りの通所介護施設を備えた「複合型助産院」。

全国で初めて、2月に来た。助産師や看護師の資格を持つ約40人が働く。

取材に向くと、代表で助産師の山本文子さん(62)が案内してくれた。日なたほっここの気分で、老いも若きも寄り添う場所にしたくて。

『ほっこ』の意味が、初めてわかった。

山本さんがこんな話をしてくれた。

3月下旬、30歳代の母親がこの助産院で二男を産んだ。その時、陣痛で苦しむ母の様子を、2歳の長男が父と一緒に見守った。長男は母の手を握り締め、大声を上げた。ママ

マ、ほくもがんばるからね。母は思った。「お兄ちゃんになったのね」

数日後のこと。通所する80歳過ぎの女性が助産師に勧められ、その二男を抱いた。「かわいいねえ」。女性の笑みを見て、付き添いの夫は言

った。「認知症の妻がこんな優しい表情を見せたのは久しぶり。夫のほおを涙が伝った。

山本さんは語る。

「人と人が出会い、支え合う助産院に。私たちはそれを目指しているんです」

約30年にわたり、高松や岡山などの病院で助産師を続けてきた山本さん。「新しいタイプの助産院を」。長年の「夢」をかなえようと、2年前、知り合いの看護師真鍋由紀子さん(62)と写真上と立ち上がった。



「孤独を感じる高齢者も少なくなる。そんな思いをみんなが共有している」

生まれたばかりの赤ちゃん。その周りでお年寄りが温かなまなざしを向ける。人と人の強い絆。この助産院には、昔懐かしい大家族の雰囲気がある。心のつながりの大切さを訴える記事を、書き続けた。

(杉目真吾)

しかし、採算度外視の試みに融資する銀行はなかった。「私たちの夢を、一口100万円で買ってください」。知人を一人ひとり説得した。57人が賛同。3か月で1億円余りを集め、開設にこぎ着けた。これまでに4人が生まれ、三つの新しい命が、近く誕生する。真鍋さんは言う。「命の誕生って、すごい。私らがどんなに努力しても、かなわないパワーがある」

通つてくる高齢者は毎日3〜4人。山本さんの夫隆夫さん(62)と写真下は、主にお年寄りの介護を手伝う。大手電機メーカーを退職後、介護ヘルパーの仕事をした。お年寄りが日常生活の延長として、気ままに過ごせるように。そう願っている。

ここで働く約40人は大半が手弁当だ。山本さんは語る。

「支え合う人が増えれば、孤独を感じる高齢者も少なくなる。そんな思いをみんなが共有している」

このページに悲しいニュースはありません



かがわ